阪神・淡路大震災と文学・文学者（二）

――小田実・田中康夫・金時鐘などの表現行為について――

吉田永宏

（二）陳舜臣『神戸　わがふるさと』[1]

1

神戸の三度の災害と陳舜臣　阪神大震災の前年の夏、宝塚に於いて講演中に脳内出血で倒れた作家・陳舜臣は五ヵ月の入院生活を余儀なくされ、一月十三日に退院し、その四日後に神戸の自宅でこの未曽有の大地震に遭遇、しかもその後、沖縄での五十八日に及ぶリハビリ生活を送らねばならなかった。『神戸　わがふるさと』の序に、《神戸はまちがいなく私の故郷である。その故郷は二十世紀になって、三たび大きな災厄に遭っている。一回目は昭和十三年の大水害で、神戸は泥のまちとなった。流失または全壊家屋七千、浸水家屋二十二万、死傷行方不明三千七百人だった。二回目は神戸に限らず、日本の主要都市がそうであるが、アメリカ空軍による空襲であった。昭和二十年三月十六日と六月五日の二回で、文字通り神戸は灰燼に帰した。三月の空襲で十年あまり住んだ海岸通の我が家は焼失したのである。／最後は地震である。私は一九九四年八月、宝塚で講演中に脳内出血で倒れ、五ヵ月入院していた。退院して四日目に地震に遭った。／多くの人に援けられ、私は慟哭の世紀を生き抜いて

いる。》と書いた陳舜臣は、震災について書くことはつらいと言う。《震災について書くことはつらい。七十年も住んだまちの最後など、書けるものではない。そのまちの再起を書けばよいのだろうか。近ごろ神戸のことを考えると、ふと涙ぐんでしまう。病気のせいで気が弱っているためかと思うが、病気でもない神戸っ子の家内も私とおなじなのだ。[2]》

前掲文にあるように神戸の街が潰滅に瀕するのを不幸にして三度も目にしたという陳舜臣であるが、《大地が揺らぐという、激しい地震が、三つの災厄のなかで最も衝撃的であった。私たちは、ほとんど茫然自失のなかにいる》と述べた上で、次のように神戸市民に対して訴えかけている。

それでも、人びとは動いている。このまちを生き返らせるために、けんめいに動いている。亡びかけたまちは、生き返れという呼びかけに、けんめいに答えようとしている。地の底から、声をふりしぼって、答えようとしている。水害でも戦災でも、私たちはその声をきいた。五十年以上も前の声だ。いまきこえるのは、いまの轟音である。耳を掩うばかりの声だ。／それに耳を傾けよう。そしてその声に和して、再建の誓いを胸から胸に伝えよう。（中略）／神戸市民の皆様、神戸は亡びない。新しい神戸は、一部の人が夢みた神戸ではないかもしれない。しかし、もっとかがやかしいまちであるはずだ。人間らしい、あたたかみのあるまち。自然が溢れ、ゆっくり流れおりる美わしの神戸よ。そんな神戸を、私たちは胸に抱きしめる。[3]

陳舜臣は被災者としての体験から、神戸の大震災に於けるボランティアの活動とそれに代表される人と人との連帯に最も大きなプラスのベクトルを認めようとする。以下にそれを引いてみる。

たとえば、神戸の復興が精神的にボランティアに頼ったとすれば、都心に世界的なボランティアのセンターをつくり、それを緑で囲めばよい。全世界にむかって、神戸で発光するのだ。株式会社といわれたまちが、大きく変貌するのである。神戸が発光体になる何かが、求められる。しかも、それは新しいタイプのもので、ボランティアでも、これまでのものとは、どこかが変わっていなければならない。／こんなときに夢を語ることについて、異論があるかもしれないが、こんなときだから、夢なのだ。夢とはいえ、それは限りなく現実に近いのである。／私たちは震災で尊い犠牲になった人たちに、多くのことをしなければならない。神戸の精神的改造もその一つである。――あなた方のために、これだけのことをします、またしました、といえるようにがんばろう。[4]

私たちは生きているが、そのことを意識することはめったにない。生きているのは、あまりにも自明のことだからである。従って生きていることを意識するのは、よほど特殊な場合ということになる。／その特殊な場合を、私たちは経験した。阪神大震災がまさにそれであった。あまりにも自明すぎて、これまで考えもしなかった、さまざまな問題を、あらためて考えることになった。大地震はありうる災害であり、その意味では自明のことといってよい。人びとは生きるという自明のこととともに、現実におこった地震について、より自分に近いものとして考えるようになった。（中略）／この震災で、神戸の市民が忘れ得ない感銘を受けたのは、ボランティアの無私の活動である。神戸はまもなく立ち直るであろうが、そのとき、物心両面から受けたボランティアの恩を忘れてはならないと思う。復興した神戸が先ず第一に手がけるべき事業として、私はいつまでも恩を忘れない意味もこめて、市の中心部に、ボランティア会館を建設することを提唱した。（中略）／清末の

思想家譚嗣同（ルビ・ママ）（一八六五―一八九八）は、忠も孝も、兄弟も夫婦も、差別があり、五倫のなかで差別がなく自由平等なのは「友」のみであると言った。友は俠にも通じ、これがつぎの時代のモラルであるという。改革運動に失敗して死刑になるが、その前に日本に亡命すれば助かるのに、彼はそれを拒否した。／これが友の道であり、震災で人びとを感動させたボランティア精神もそれにつながる。（中略）／震災の二日後、私は神戸から京都へ八時間がかりで避難し、十日ほど滞在して、リハビリのため沖縄に渡った。病後の私をあたたかく迎えてくれた京都、そして沖縄の人たちの友情は、いつまでも忘れることはできない。[5]

2

思い出すのも辛いとの真情　陳舜臣は自身のその日の体験に触れて、《あちこちで火の手があがった。我が家の二階からは神戸の東部が、一望のもとにみえる。ひょっとすると、これはこの世の終わりかもしれない。私は不自由な足をひきずって、しだいに明けて行く空が、焔と黒煙につつまれているのを眺めた。暗いうちは火は近くにみえたが、ようやくJR六甲道駅のあたりらしいとわかった。芦屋にいる娘が無事なことは、深夜になって判明したので、ほっと息をつくことができた》[6]と述懐しつつ、震災のことを書くようにとの多くの要望に対しては体調を理由に断わってきたが、書くことだけではなく、思い出すことも辛いとの真情を吐露した上で、《それにこんどの地震は、はばのせまい活断層がうごいたようで、道路ひとつへだてて全壊した町なみがならび、そのむかいの筋は揺れはひどいが、倒壊にはいたらないといったケースが多い。私の住んでいる地域は、被害からいえばそれこそ大したことはない。私たちよりもっとひどい目に遭った人が多い。肉親を目の前で失ったような人たちの、なまの声をこそきかせるべきであると思う。震災の正史は、これから作られ、いまはその実録を集める段階なのだ》[7]

と自らの被害について控え目に語り、「復興」「復活」「復旧」について次のような願望を記している。

旧にかえるのでなく、新しい神戸をつくりあげることを望む。株式会社神戸市といわれた、かつてのこのまちの性格を一変してほしい。金儲けよりも、もっと大切なものがあることを、この震災によって知ったはずである。あの盛りあがったボランティア活動の一と澪が、新しい神戸を育てるだろう。弱い者が安心して住めるまち、これまでのように裏側に追いやられるのではなく、社会の第一線に胸を張って歩けるまち。それが出来れば、空港などは要らない。亡くなった人たちの冥福を祈るたびにそう思う。[8]

《語部になろう》との提唱　震災で、なによりも「生活」を奪われたという実感を持ったと言う陳舜臣は、その実感に立って《語部になろう》との提唱をしている。《私たちは特別な人のほかは、震災の一部分しか見ていない。とくに病人は、あの二十秒とあとはおもに写真やルポによる情報である。だがどんなことであれ、史上初といわれるこの災害を、後世に伝える努力を惜しんではならない。せっかくの体験を風化させては、勿体ないではないか。絵をかける人は絵で、写真好きは写真で、そして私たちは語部になろう》[9]というのがその呼びかけである。語部となって周辺の人びとや或いは後代の人びとに語り伝えるべき内容は、《株式会社神戸市といわれた、かつてのこのまちの性格を一変》させるためのものであり、《金儲けよりも、もっと大切なもの》の追求であり、《弱い者が安心して住めるまち》への住民自らの主体的努力に拠る変革の営みであろうし、その具体的一例としての《空港などは要らない》という意志表示なのであろう。表現は穏やかではあるが、小田実の示すそれと共通するものでもある。

震災を通じて為政者やそのシステムへの小田実の鋭角的な発言は前回の論に於いて繰り返し取り上げたが、陳舜臣の発言で小田実のそれと通底するものをもう一つ掲げておく。

五年もたったのだから、とうぜん復興のことを点検しなければならない。じつは壊滅した「わがまち」を、この目で見た瞬間から、私たちは復興するであろう「わがまち」を、この心で思い描いたはずである。／五年前の震災の数日後、私はくずれた神戸のまちと罹災した人たちへのメッセージのつもりで一文を寄せた。それは目の前の焦土に復興したまちを重ね合わせ、「神戸は亡びない」と呼びかけたものである。その文章は、／――新しい神戸は、一部の人が夢みた神戸ではないかもしれない。しかし、もっとかがやかしいまちであるはずだ。人間らしい、あたたかみのあるまち、自然が溢れ、ゆっくり流れおりる美わしの神戸よ。そんな神戸を、私たちは胸に抱きしめる。／と、結ばれている。／瓦礫と焦土のなかで夢みた「美わしの神戸」は、まだ出現していない。ユートピアは手が届いたとたんに、消滅するものかもしれないが、その方角だけははっきりとわかっていてほしい。どうやらその方角が、あやしくなっているようだ。／ハード面での復興は着々と進んでいる。予想以上の進捗ぶりだといってよいかもしれない。この面で努力された人々の貢献は、けっして忘れられてはならない。だが、ハード面の復興に、破壊された生活の再構築が、充分伴っていないように思う。この「生活」ということばは、最大限にひろい意味にとってもらいたい。[10]

病床にあって罹災した陳舜臣は、自らを《特殊なケース》として把え、《弱者として大災害に遭うことは、心細いかぎりである。それに私は満七十になっていたから、高齢者の気持ちもよくわかる》が故に語部になり得るかも

しれないと考え、ボランティア活動について以下のように伝える。《弱者にとって頼もしいのは、ボランティア活動である。阪神大震災で私が最も感動したのは、若者たちが「何かお役に立ちたい」というだけで、神戸に集まってきたことだった。（略）／昨日までは何ということもなく、夜の巷をうろうろしていた若者である。たまたまそのあたりで出会い、「神戸はたいへんらしいな。なにかできることがあれば手伝おうか」と、相手の名もろくに知らないのに一緒に来たというケースもある。だが、彼らはグループではなく、あくまでも個人個人なのだ。／彼らはよく働いた。未組織、未訓練なのに、どうしてこんなに段取りよく仕事をするのか、とくろうとが感心するほどだったという。彼らははじめから、何かしたくてたまらなかったのだ。それが何かわからなくて、夜の巷を徘徊していたのである》と、若者たちに希望を託するに至るのである。

前章で、小田実の家族との関連で在日朝鮮人の被災の問題に触れておいたが、『朝日新聞』（03・9・27、大阪版）に掲載された《地域のFMで母国語の発信》という見出しの投書があるので、陳舜臣との関りを有つものではないが、以下に紹介しておく。投書者は朴明子さん、神戸市在住、六十二歳の主婦である。

阪神大震災をきっかけに、地域に発信するラジオ放送局として神戸市長田区に設立された「FMわぃわぃ」は、八つの言語で放送している。約160人ものボランティアがいろんな形で局を支えているが、私は昨年の夏から、週1回、パーソナリティーとして参加している。

「ヨロブン、アンニョンハセヨ（みなさん、今日は）。お聴きの放送はFMわぃわぃです」。こうして番組は始まる。コリアの音楽を流し、おぼつかない母国語も使いながら、2時間の生放送だ。地域や関西の情報、そして在日コリアンとして体験したこと、思っていることなどを話す。

私は趣味で演劇をしていることからお声がかかったのだが、母国語と日本語を混同したり、時刻を間違えたり、と失敗もある。けれど、スタッフの中で恐らく最年長と思われる私が、めげずに、一度も休まないできたことがうれしい。

話のネタに頭を悩ませながらも、楽しくて、局に向かう足取りも軽くなってきたところだが、財政難などで規模が縮小されるという報に接し、残念でならない。

(三) 田中康夫『神戸震災日記』[11]

1

直ちに被災地へと考える　《正直な話、地震当日は僕も数多（ルビ・ママ、以下同じ）の傍観者の一人でしかなかった》という作家・田中康夫（のち、長野県知事）が被災地に駆けつけようと考えるに至ったのは伴侶の女性（実家が西宮市）が自身の家族の無事を再び確認した上で客室乗務員としての任務に就いた二日目に入ってからであったという。無事であったとは言い条、彼女の実家の二階は滅茶苦茶で上がることもならず、辛うじて平気な一階も廊下が歪んでしまって歩けず、父親が買い集めていた陶磁器の類は全て割れてしまっていたという有様であった。関西との縁の深さを強く意識していた田中康夫が、《このまま東京に居て、何時もと変わらぬ生活を続けて許されるものだろうか、という疑問が頭を擡げて来た》と語る自らの意識の変化は、決して単なる思いつきや一時的な英雄主義に基づくものではあるまい。その際の自らの思いについて田中康夫は次のように書いている。

こうした衝動は、「湯煙のようです。温泉場に来たような」と三文文士の僕でも気恥ずかしくて口に出来な

いような〝文学的〟表現が第一声だった筑紫哲也氏だったり、沈痛な面持ちで現地からの報告を聞いて尤もらしい一言を付け加えた直後に相好を崩して長嶋監督を褒めた徳光和夫氏だったり、所詮は対岸の火事でしかない「東京目線の報道」振りを見て、更に僕の中で大きくなったと思う。[12]

地震発生の二日後、ボランティアで参加したいとの電話での申し込みを西宮・神戸などの各市役所に宛ててするが、いずれも「現在は間に合ってます、取り敢えず登録してくれれば後で連絡します」との返事に戸惑い、《何千人もの人々が亡くなって、何万人もの人々が傷ついて、何十万人もの人々が住まいを失った街なのに人手が足りている?》との《絶望的もどかしさ》を感じ、カトリック大阪教区大司教館（在西宮甲陽園）神父の「バイクがあれば渋滞に関係なく物資を運ぶことが出来ますよ」との返事に〝啓示〟の授かった思いをする。その一言で決断した田中康夫は、《生まれて此の方、乗ったこともないバイクで阪神間の被災者の許へと必要な物資を届けよう。この作業ならば、土地勘という僕の知識も活かされる。早速、何人かの大阪在住者に電話して50ｃｃバイクを見付けて欲しいと頼んだ》と持ち前の行動力を発揮する。地震発生後四日後の一月二十一日土曜日早朝、田中康夫は関西空港に降り立った。大阪在住者の一人の世話で手に入れたバイクの荷台に大きなプラスチック製の衣裳箱を括り付け、背中のリュックにも詰め込んで水のペットボトルを三ダース、大司教館へと持ち込んだ。以後、この大司教館を主要基地とし、更に神戸・異人館から程近くの中山手教会を前線基地とし、バイクの荷台に大きな衣裳箱を括り付けたこのスタイルを基本スタイルとした田中康夫の活動が展開されることとなる。活動開始の段階で、ペットボトルを手渡そうとすると決まって、もっと困っている方にどうぞ差し上げて下さいとの固辞に遭い、阪神間の人びとは皆、冷静で慎み深いとの印象を受けたと言う。

厳しい批判・質問を自身に　二日間の行動の後、一旦東京へ戻った田中康夫は、顔の効く企業の広報担当者の許へ出向き、機内用カミソリやアイマスク、ドライシャンプーや歯ブラシ、下着や靴下、漫画雑誌を幾何か提供して貰えないかと頼み、日航、全日空、キャセイパシフィック、資生堂、ベネトン、小学館の即座の呼応を得る。自分で買い求めたダンボール何箱かのカイロと共に最終便で再び関西に戻ってきた。《大企業を脅して貰ってきた物資を配ってるだけじゃないかと嘲弄されるかも知れない。風呂付きの部屋から出動するなんて偽善だ、と冷笑されるかも知れない》との厳しい批判、質問を、敢えて自身に突きつける。支援活動の動機づけの問題であり、支援する側の主体の確立を促す問いでもそれはある。その上で、自身への問いに対して田中康夫は次のように答えるのである。《反論は、すまい。が、出来ることを出来る範囲で行うのがボランティアなのだと思う。そして、阪神大震災とは、イデオロギーに関係なく人々がボランティアし得た、初めての契機となるのではないか》。これが阪神・淡路大震災被害者に対する支援活動に身を置く田中康夫の「哲学的基礎」であった。

このように活動に入って行く田中康夫であるが、しかし、東京での準備に熱中する彼の眼に入った若者たちの実像とその印象は、《4WDのRV車を路上駐車してゲレンデ行きの準備に余念がない若者を始めとする行き交う人々の表情は並べて、神戸とは無縁に見える。その何れもが同じ国の中の出来事だという点に、名状し難き違和感を抱く。[13]》というものであった。

現地に到着した田中康夫の眼に映じたのは、《武庫川に架かる武庫大橋を越えて西宮に入った途端、状況が一変。倒壊家屋が国道沿いに目立つ。JR西ノ宮(ママ)駅手前、一階にスーパーマーケットが入っていた集合住宅の途中階が押し潰されている。その先、卸売市場に至っては廃墟の如し。／夙川橋の手前、神楽交差点を右折。山手に位置する甲陽園方向へ夙川に平行して進もうとするも、個人住宅が幾つも全壊していて状況は更に深刻。傾いた家や電

柱が道路にはみ出し、片側一車線のバス通りは交互通行。》といった現状であった。一方で、《倒壊した百貨店のそごうを左手に見ながら走行すると、センタープラザの前にフジTV系列の中継車やハイヤーが二〇台近くも二列駐車。支局でも入っているのか。渋滞を引き起こしているのに、報道記者やカメラマンの〝出動〟を待つ運転手の人達が談笑している。被災地の人々に役立つ情報よりも全国のTVの前の視聴者のニーズに応え続ける東京目線のマスコミを感じる。》と、目撃した一情景に対しての批判を当然のことながら田中康夫は忘れてはいない。TVのカメラに映し出される被災者と、それを映し伝える報道関係者と、そして何よりも量的な絶対者である非被災者たるTVの前の視聴者という、各々異なる立場性を有する存在としてのこの三者をどのように認識すればよいのか、表現者としての文字通りの立場性を問われるところである。

この問題は全ゆる場面に於いて田中康夫を捉えて放さない。例えば、《再び疑問を抱く。あの物資は、どのように分配されるのだろう、と。その場に居た中高年の信者の人達は皆、礼節を弁えた人々だった。けれども、察するに彼らは住む場所を失った訳ではなさそうだ。倒壊した教会が心配でテントに集まっていたのだ。近隣の人々が受け取りに来るのだろうか。だが、周囲は官公庁の建物が多い地区なのだ。》というようにである。

JR鷹取駅南側の長田区海運町にある鷹取教会と地下鉄名谷駅北側の須磨区北落合にある北須磨教会へ食料品を届けて欲しいとM神父に言われた田中康夫はバイクを走らせる。

ガレキが散乱する路地に入って、裸電球が辛うじて点いているだけの半壊建物の間を縫って行くと、午前中、大阪から向かって来た時とも又違った不思議な昂揚感が心の中に湧いてくる。出火した跡の見られる建物が所々に並ぶ。暖を取る為に焚き火の回りに人々が集まっている。猶も進むと、未だ通電していない地区に差

し掛かる。電気工事会社の作業員がクレーン車の上に乗っているのを見守る人々が居る。（略）／国道2号線を西進し、板宿から下りて来る県道22号神戸三木線を越えた右手は一面、焦土。跡形もない。敗戦直後の写真を見ているかのよう。焼け焦げたゴムの臭気が鼻を衝く。そうして、六甲颪の風が頬を刺す。夙川地区に続いて、言葉を失う。無論、通電していない。というよりも、残っている建物など皆無に等しい。バイクの前照灯だけが光源だ。[14]

甘ったれ坊やのボランティアごっこか　自身への問いかけは常に存在し続ける。神戸にやって来て二日目の「ボランティア日誌」一月二十二日（日）の章でも繰り返し記している。《風呂とベッドの〝都市生活〟を満喫した上での甘ったれ坊やのボランティアごっこかい、と揶揄されるのは覚悟の上だ。そうした批判を撥ね退ける為にも継続こそが力だと自分に言い聞かせる。出来ることを出来る範囲で出来る限り長く活動し続けよう》。《リュックサックの中に入れていたポケットカメラとノートブックは部屋に置いていくことにした。然して深い意味合いはなく、ひょっとして必要とする時が有るかも知れない、と思って入れていたのだった。だが、昨日丸一日回るうちに、軽い自己嫌悪に陥っていた。僕は取材の為に神戸を訪れている訳じゃない。他人事とは思えなくて、50ccバイクを買い求めたのだ、と。ピースサインの見学者や黒塗りハイヤーの報道陣と一緒の自分になってしまうことには抵抗があった》。

芦屋市宮塚町の建物の軒下で立ったまま握り飯を食べている熟年世代の夫婦を見かけ、どういった物資が足りないのか問うたところ、二人が口を揃えて「風呂に何日も入っていないから、ウェットティッシュやドライシャンプーがあったら嬉しい」と教えてくれ、更に、現在でも余震が頻繁に起こるので、避難所では夜通し天井の照明を点

けていること、それが原因で不眠を訴える人びとが老齢者を中心に数多いことも教えてくれたと言う。当事者でなければ解らないことであり、一方通行の思い込みによる単なる善意に基づく厚意ならばスレ違いに終わってしまうこともあろう。《目から鱗が落ちる思いだった。実際に被災地を訪れて、実際に被災者に聞いてみなくては判らない事柄があるのだ》と記しているが、田中康夫が、ウェットティッシュのボックスを大量に買い求めようと考えついたのも、化粧品メーカーの広報担当者にドライシャンプーを、航空機会社の広報担当者にビジネスクラスの搭乗者に配るアイマスクの提供を呼びかけたのもこの二人との会話がきっかけであった。《最初の一週間は誰もが無我夢中かも知れない。だが、次第に、壊れた自宅の家屋や集合住宅の再建への道程は険しく遥かなることを自覚せざるを得なくなるのではあるまいか。そうした時、一本の鮮やかな色合いの口紅を引くことで、或いは肌に潤いを与える化粧水を叩くことで、仮令、一瞬にせよ彼女達は年齢になど関係なく癒されるのでは、と思ったのだ》というのも田中康夫自らの認める直感によるものであったろう。但し、当座の生活必需品はこのようなボランティアの行為によってそれを必要とする被災者に手渡すことが可能であろうが、被災者が真に必要とし、真底欲していたものは無論それで事足れりとするわけのものでは決してなかった。早い段階で、田中康夫はその点について次のように述べている。

> 神戸の同和地区にセツルメントを設けて地域住民の生活向上に尽力したことで知られるプロテスタント信者の社会事業家・賀川豊彦氏（一八八八～一九六〇）は、関東大震災の直後、逸早く航路で横浜港へ向かい、横浜・東京の様子を具に観察するや一旦、神戸に取って返し、態勢を整えて再上京後は息の長い活動を、被害が甚大だった下町に拠点を置いて行ない続けた。尤も、その事実を僕が実際に知ったのは三月に入ってから、

彼の書いた本を読んだのが切っ掛けだ。レギュラー番組のラジオ出演がスケジュールの上で入っていたこともあるが、二日間の活動の後、東京へ戻って必要な物資を調達しようと当初から考えてはいた。

続いて隣接する茶屋之町で出会った人品卑しからぬ女性の言葉も、僕を覚醒させた。五〇代半ばと思しき彼女も、ヘルメットを被ったままの僕を直ぐに見分けた。「お家は平気でしたか？」と尋ねると、「ええ、まあ、なんとか」と言葉少なに答えた。「他にはどういったものが必要なのでしょうか？」と話題を変えると彼女は「それよりも、これから先のことが、どうなるかねえ」と述べ、溜め息ともつかぬ息継ぎをした。[15]

「公」に対する怒りを激白　一月二十三日、東京・文化放送の「本気でＤＯＮＤＯＮ」（進行役・梶原しげる）に二時間の生出演をした田中康夫は、神戸で感じた「公」に対する怒りを激白している。二日ばかり現地を回っただけで生意気な口を利くな、とのリスナーからの指摘があり、それに対し、《税金を使えばいとも簡単に修復出来る道路や鉄道と違って、個人の物心両面の復興には時間が掛かる。少なくとも桜が咲くまでは続ける。売名だの偽善だのという科白は、途中で挫折したら幾らでも吐いてくれ》[16]と答え、品川区の薬局で買い込んだ懐炉、応急絆創膏、風邪薬等を携えて最終の日航119便で関空に飛んでいる。

震災への宗教関係者の態度に対する田中康夫の眼差しは厳しいものである。

東灘区住吉宮町の住吉神社に参詣している人々を見掛けて、何なんだ、と思ってしまう。年末年始に〝大儲け〟した神社の総元締めたる神社本庁は今回の震災に対して、何ら組織立った動きをしていない。月曜日の「本気でＤＯＮＤＯＮ」放送中に神社本庁へ電話すると、「まあ、地元の神社では各々、何か行なっているよう

ではありますが」と広報担当者が答えて驚いた。神道には隣人愛など馴染まないのか。／だが、カトリックとて誉められたものじゃない。現場の聖職者に全ては委ねられていた、と言えば聞こえは良いが、表現を変えればそれは同じく組織立った動きではなかったことになる。（略）／プロテスタントとて、今でも同様なのかも知れない。暫く後に読んだ賀川豊彦氏の文章の中には斯くなる箇所がある。曰く、日本の信者達は教会を建て替える時には嬉々として献金するが、今回の関東大震災では実に動きが鈍い、と。

ただ、被災者の側の反応についても田中康夫の感性は甘くはない。阪神・香櫨園駅前を過ぎた市庭町の一廓で、半壊住宅に留まる一家の親父さんにヒゲ剃りを渡したところ、「有り難う。あんた、何処から来たか知らんが、サンタクロースみたいだな」と叫ばれたが、それに引き換え二〇代半ばと思しき息子は、『ビッグコミックスピリッツ』を手渡しても空気が白い。《欲しいのか欲しくないのか。嬉しいのか、嬉しくないのか。或いは、咄嗟には言えなかったのかも知れない。が、人間としてのこうした最低限の意思表示、詰まりは心の潤滑油をお互いが持ち合う教育が行なわれてこなかったのが戦後の効率主義的日本だったのでは。》[17]とは、差し出した側の感性としては正当なものであり、その青年がわたし同様コミックに全く関心を持たぬ人間ではない限り正論であろう。

被災地を訪ねた田中康夫は、そこで様ざまな外国人と出会う。長田区役所近くの新湊川公園で出会ったイスラム教団体の外国人は、「なんでもやります」と書いたチラシを配り、物資の配給、炊き出し、倒壊家屋の片づけなど全ゆることを手伝っていたと言う。

また、田中康夫に同行した『週刊ＳＰＡ！』編集部の田中陽子記者によると、ＡＭＤＡ（アジア医師連絡協議会）に参加する青年は、田中康夫が「また来るから、何が必要か」と訊いたのに対し「フロ持ってきてくださいよ」と

答えたという。風呂に一〇日間入っていないというその青年は、「震度7にも耐えられる建物や鉄道を造ろうという考え方は間違っているよ。それって、人間が地球に勝てると思い込んでるんだもの。それよりも、島原の災害の教訓をなんら生かせなかった行政は、今回の震災でわかった救援活動の手順を、メンタルな部分のケアも含めて克明に残すことだよ」[18]と言ったという。

被災者との落差に頭を抱え込む　私立神戸村野工業高校（当初は震災による遺体の安置所として使われ、のち避難所となったが、一月二十五日まで市に登録されておらず、従って救援の物資が全く届かなかったという）に避難していた六〇人程の人達の中で『JJ』を読んでいた二〇歳位の女性は、「店を開けろ」と中内功総師の命令したダイエーが新神戸駅前で経営するショッピング・アーケードのOPAで働いている人で、七キロ近い道程を自転車で通っていて、「ヴィトンだのエルメスだの提げてヘラヘラしている同年代の女の子が載っている『JJ』なんて見ていると、ムカついてきません？」との田中康夫の問いに、黙って含羞み笑いをし、何ら被害は無かった六甲山の向こう側からの北神急行電鉄は運行していて、小・中学校が一律休校となって暇を持て余し気味の北区の児童・生徒が母親と一緒に大挙押し掛けて来ているのだと飄々とした口調で語ってくれたと言う。《自身の境遇とのあまりの落差を、彼女は心の中でどのように埋めているのだろう、と考えてしまう》と田中康夫は頭を抱え、更に次のように背く。《知己の『JJ』編集長に活動を話しがてら〝おねだり〟（電話で救援物資を――吉田）すると、「ウチの雑誌は独自に救援活動行なってるから」と言うなりガチャン。家もブランド品のバッグも洋服も無事だった芦屋の山手の〝物質的令嬢〟を次号の読者モデル用にと探し出すことが被災地に潤（うるお）いを齎（もたら）すボランティアだと信じているのだろう。避難所の読者の姿を熱っぽく語った僕が愚かだった》[19]。

それにしても、阪神高速神戸線の倒・損壊に伴い片側二車線に規制されていた国道43号線の実状は酷いものであった。田中康夫自らが目撃し経験した事柄を次のように証言している。

左折ウィンカーを出しっ放してバスレーンを疾走する黒塗り一台。バイク故に渋滞の列の脇を走り抜けられる僕が赤信号の交差点で追い付くと、何のことはない、左へ曲がる振りをして信号が変われば又もや直進で大阪へと帰りを急ぐ記者一名のみを乗せた「朝日新聞」社旗をはためかしたハイヤーだった。／（略）「朝日新聞」神戸支局は、築後間もなかったこともあって殆んど被害を受けていなかった。ＦＡＸもパソコンも写真電送機もフル回転していた。ネクタイ姿の記者がハイヤーで大阪本社まで伝令係を務めねばならぬ理由など、チト考えられぬ。「ズルするなよ」と窓をドンドンと叩くと、逆に中から睨み付けられる。

兵庫県と大阪府を結ぶ伝法大橋の上で車体の下から火を吹いている乗用車に遭遇。逃げ出した家族連れは為す術も無い。僕はバイクを停め、ヘルメットを外すと、携帯電話で大阪府警に１１０番。が、「国道43号線、伝法大橋、東行き路肩で乗用車の車両火災。大阪側梅花交差点への下り側道と高架本線の分流地点から兵庫側へ目測で二〇〇メートル戻った地点」と伝えるも、先方の第一声は「住所（所在地、場所、行政区画上の地点の意であろう――吉田）から言わんかい」

橋の上の住所など知る由も無い。改めて伝えるが、聞く耳を持たず。思わず「馬鹿野郎」と怒鳴って電話を切ると、直ぐに呼び出し音。ガールフレンドだろうかと緑色のボタンを押すと、「警察に対して馬鹿野郎とは何だ」と〝罵声〟が聞こえて来た。掛け直す特別機能が完備しているらしい。が、そんな設備の充実よりも前に行なうべき事柄が有りはしまいか。因みに乗用車は、その間に宅配便のトラックの運転手が乗り込んで移動

させていた。下に新聞紙を巻き込んで火が付いたのだった。市井の人である彼の勇気に比べれば、110番の警察官のみならず僕も意気地無しなのだった。[20]

2

中内功ダイエー会長への手紙　田中康夫に「四人への手紙[21]」という文章がある。四人とは、いずれも阪神大震災と大きく関わった商品流通企業の経営者、人気ジャーナリスト、更には自治体の長といった人びとである。

手紙の最初の宛先は中内功である。田中康夫は偶然立ち寄ったダイエー長田店の真新しい立派な店舗裏の納品口にテントを張っての同社従業員の〝獅子奮迅〟振りを目にしたが、そこで売られていた青い小さなリンゴは一個一〇〇円であった。複数の住民の証言に拠れば、目と鼻の先にあるジャスコは古めかしい建物の前で一五〇〇円相当の品物を袋詰めして小銭の要らないジャスト五〇〇円で販売しているのに、と（ダイエーの従業員たちが――吉田）苦情を述べる迄の間、消費税も一円と違わず併せて申し受けていたと、如何なる局面に於いても利潤追求の基本理念を失わない経営トップとしての天晴れ陣頭指揮ぶりを紹介した上で、その中内功の勇姿をおし並べてマスコミが好意的に扱ったと述べ、《林檎一個一〇〇円の価格設定には利潤が含まれている筈、と経営には素人の僕は考えます。思えば、神戸がダイエーを育ててくれたのです。人口二一六万の阪神間にとっては正に焼け石に何とやらでしかない僅か一〇〇トンの水を店頭で配布したことを美談として聞かされても、ですから、素直に拍手出来ません。》と心情を披瀝し、更に以下のように書く。《色鮮やかなブレザーを着て記者会見に臨まれた中内様は、三宮等市街地店舗の再建は〈お客の動向を見て対応したい〉とお答えになりました。何年か前にお会いした際、規模の小さい

古くからの神戸の店は効率が悪くて、と呟いておられたのを僕は思い出しました。その上で眺むれば、赤字続きだった三ノ宮駅ビル内のプランタン神戸を震災後に急拠、会費会員制ホールセラーのコウズに業態変更なさり、入口で新入会員申し込みをなさっている絡繰りも見えて来ます。本当に神戸を愛してらっしゃるのなら、店名はプランタンの儘、被害を受けて閉鎖中のハーバーランドコウズの商品を従来と同価格で春までは会員・非会員の別なく販売する位な英断を下すべきではないでしょうか。なのに、僕と同じ疑問を抱いた新聞記者に貴社の広報幹部は「記事にしたら許さんぞ」と声を荒らげました。》[22]

筑紫哲也の姿勢への疑問　「四人への手紙」の次のものは筑紫哲也に宛ててのものである。前にも触れたように、「湯煙の灯火以外に些かの光源も見当らない真っ暗な焦土に未だ立ち籠めているゴムの焼けた臭気は、貴兄がヘリコプターから舞い降りた数日前にはより強く鼻を突いたであろうに、と第一声で臭いに言及しなかった理由を訝りました。》と、まず記した。田中康夫は〝筑紫ジャーナル〟門下生を自認する人物である。その田中康夫が、自分に代わって自身の住民票でバイクの登録を行なってくれた大阪の西区在住の人物から筑紫の現場主義の実態を耳にし、〝筑紫ジャーナル〟門下生の肩書きを返上したい気分に陥るまでに至る。その理由は以下の通りのものである。

イベントプロデュースの会社に勤める彼の同僚は、焼死した両親の遺骨を拾っていました。と、そこへドカドカと貴兄を含む一行が訪れ、すみません、撮らせて戴けますか、との言葉すらなく勝手にカメラを回し始めたのです。その同僚は必死に耐えました。自分もマスコミで禄を食む一人や、ここで怒ったらあかん、と。／

が、貴兄は彼に向かってマイクを突き付け乍ら宣いました。何をしているんですか、と。貴兄は視力が悪いのでしょうか。将又、涙で目が霞んでいたのでしょうか。否、そんな筈もありますまい。映像と音声から成る「テレビ報道」の〝お約束事〟として、判り切っている事柄を敢えて問い質したのです。そうして、マイクのみならずカメラも又、お約束事の一つであるアップの絵を、執拗に舐め回すが如く収め続けました。／両親を亡くした彼はそのお約束事に耐えられなくて、立ち上がるや貴兄に向かって叫びました。止めてくれ、と。

田中康夫の思想は、《遺骨を拾っていた彼は、「公人」では有りません。打ち拉がれた「私人」です。その彼との間に交わした、無許可で撮影した映像と音声は流さない、との約束を反故にして「報道」という名の下、彼の哀しみと怒りの表情を全国に晒した「ジャーナリスト」筑紫哲也のメンタリティを僕は憂えます。》と言うにある。地震発生直後に倒壊家屋から辛くも脱出して抱き合って喜ぶ「私人」を断り無く撮影しても、或いはそれは許される報道かも知れない。しかし、筑紫たちジャーナリストがその青年を撮影したのは街を舐め尽くした火が消えてからのことであり、そのような「約束の反故」に田中康夫は憤りを覚えるのである。

報道（表現）の権利・自由と報道（表現）される側（その多くは「力」を持たない一個の市民である）のプライバシーの権利の矛盾・対立の図は、文学作品の場に於いてもよく問題にされるところである。三島由紀夫「宴のあと」のモデルのプライバシー権や柳美里「石に泳ぐ魚」のやはりモデルにされた女性のプライバシー権をめぐって法廷での争いが展開されたことはよく知られている通りである。多くの場合、報道する側は力を有しており、報道される側は力を有していない。この神戸・長田の被災者のケースもカメラに撮られたくないという念には切なるものがあったに相違ない。

自身の「報道」振りに対する批判の声が高まったのを受けて筑紫哲也が「私どものスタッフで被災地へ飛び込むのを躊躇った者は一人も居なかった」と番組の中で発言したのは一体何であったろうと田中康夫は疑問を呈し、続けて、《誤解を怖れず申し上げれば、誰だって〝火事場〟を覗いてはみたいのです。求められるべきは、その上で何を胸に刻み込み、又、何を伝え得たか、ではないでしょうか。》と訴えるのである。

貝原俊民兵庫県知事への手紙　三人目の手紙の宛先は貝原俊民兵庫県知事である。震災後直ちにと言ってもよい六時四〇分に駆けつけた副知事が《とてつもない災害だ》と判断して設置したところの県庁五階の災害対策本部に、《震災発生から三時間余り過ぎていた》午前九時近くに知事が入った事実をのちに知った田中康夫は、《県庁から東三キロの中央区中島通三にある公舎》で地震に遭遇した知事が何故〝通常通り〟の《登庁》であったのかと訝る。《〈寝ていたふとんのわきにタンスが倒れ〉〈窓から外を見ると火の手が上がってい〉たと自身で『読売新聞』に語っておられるではありませんか。〈東灘区の自宅からタクシーで〉駆け付けた副知事の前掲の言葉と同じ状況認識が、貴兄にはなかったのでしょうか。「1時間早くても、どうにもならなかった。」との見出しの下、『週刊ポスト』で語っておられる「あの日」の貴兄の行動を今一度、振り返ってみたいと思います。》と書いた上で田中康夫は、《繰り返しますが、貴兄が居た公舎と県庁との距離は僅か三キロです。徒歩でも一時間は掛かりません。即座に公舎から〝自力〟で向かえば、貴兄よりも遥かに遠い〈東灘区の自宅から〉副知事が到着するのと前後して、県庁で見えた筈です。誇り高き内務官僚の流れを汲む貴兄の頭には、徒歩や自転車、タクシー、将又、ヒッチハイクといった選択肢が、「黒塗り」の代わりに思い浮かばなかったのですか。》と詰問している。

笹山幸俊神戸市長への手紙　四人目の宛名は笹山幸俊神戸市長である。一九四五年夏の敗戦と神戸震災とを比較し、《微妙且つ明白に異なる》差異に田中康夫は着目する。《もうこれ以上は傷付くまい、と誰もが信じられたのが敗戦です。八月十五日を以て徴兵制も焼夷弾も〝焼失〟したからです。併せて、自由に物を言えるようになった焦土の中で、人々には希望が有りました。未だ「豊かさ」と巡り合うこともなく、どん底への急勾配をのみ経験した戦前との訣別が、敗戦だったのだと思います。／翻って、同じく焦土と化した今回の震災は如何でありましょう。曲がりなりにも「豊かさ」を誰もが共有していた世の中で自分だけが取り残されていってしまう、曰く言い難き虚脱を人々は感じ始めているのではないでしょうか？》。敗戦時に受けた衝撃は日本人である限りまずは同じレベルのものであったというわけである。ところが震災の場合は、被災地神戸の住民と被災しなかった大阪及びその住民とでは条件が全く異なる。

大阪を始めとする恒常的都市空間へと出勤すれば、否が応にも「豊かさ」に直面してしまいます。震災前の自分達の「豊かさ」を、弥が上にも想起してしまうのです。而も、自分達の方が洗練とも呼ぶべき諦観ある矜持を有する都会人なのだ、との感情を嘗ては少なからず心の中で抱いていたにも拘らず。

そこから、《而して、着実に復興が進む「公」共交通機関を乗り継いで、夕餉の時刻を疾うに過ぎて戻れば、そこには未だ展望の欠片すら探し出せぬ損壊独立家屋並びに集合住宅が〝建ち〟並んでいるのです。「公」と「私」の何れもが凄惨を極めていた当初の暫定的都市空間内では少なくとも誰もが確認し得た共同体意識は、最早、見いだしにくいのです。「公」のみが先に復興しようと、職住近接の「私」の集合体である自営業者が共に抱き得る矜

持とは違って、それは諦観としか言い様がない感懐です。》ということになり、更に、《「日本株式会社」の戦列へと早々に復帰して、傍目には実に元気そうに映る被災地の給与所得者の〝心のケア〟をこそ、真剣に考えるべきではないでしょうか。余震を始めとする二次災害が怖くて夜になっても眠れない人は、今迄にも存在した筈です。であればこそ、内外の精神科医の手に成る対症療法が確立しているのです。が、不幸にも、一見、何の憂いも抱いては居そうにない給与所得者及び其の家族たる彼らや彼女らの心奥に潜む絶望への対症療法は些かも存せず、どころか、そうした取り組みの必要性すら殆んど語られていないのです。老齢者の在宅ケア率の低さを始めとして、政令指定都市の中でも群を〝抜〟いて低福祉だったと揶揄される自治体の首長たる貴兄は、如何お考えでありましょう。》と詰問する。

貝原兵庫県知事への再信　貝原俊民兵庫県知事に宛てた再信では、《「あの日」の自身の不甲斐無さを思い起こすべく、地震発生時刻は県知事公舎の寝室で迎えられるのが望ましかったのです。が、斯くの如き諫言を貴兄に申し述べた所で詮方無いのかも知れません。》と言いつつ、前回の拙稿で取り上げた小田実の発言と共通する、株式会社神戸市に対する次の如き厳しい「諫言」を呈せずにはいられない。

〈兵庫県、神戸市と関西経済界は阪神大震災後の復興を推進するため、二〇〇〇年をめどに同市内で震災復興をテーマとする大規模な博覧会の開催の検討に入った〉と、奇しくも「儀式」を未明に敢行された二月十七日の『日経』朝刊第一面右肩で報じられています。その最後には、〈活気ある兵庫県の復興に向けて、やらなければならないと考えている〉との貴兄の談話も載っています。／僕は、暗澹たる思いに駆られました。五千

四百余名もの犠牲者を出した〝人災〟をも、貴兄らは商売の種となさるのですね。又候、株式会社「ゼネコン改め銭魂兵庫・神戸」のみが肥え太る醜悪なパブリー発想は、〈パビリオンの建設などで大規模な需要創造と四万人を超える雇用創出が期待できる〉との美辞麗句を以てしても、覆い隠すのは不可能だと思います。

笹山神戸市長への再信　笹山幸俊神戸市長への再信は、東灘区の森南、兵庫区の松本など五地区の区画整理事業と、ところの「防災モデル都市案」について、その「復興」の仕方が間違っているのでは、とするものである。《住民の心の復興を伴なった形での都市計画でなくては、広い道路と広い公園は設けられようとも住民の〝交通〟は却って分断されてしまい、無機質な街が出現するばかり》ではないかというのが田中康夫の思想である。《どうして、こんなにも急ぐのでしょう。建築基準法八四条による二か月の建築制限が切れる十七日（三月）までに都市計画決定を行なえ、と建設省が〝令〟を下していたからです。（略）建設省の官僚が神戸市を訪れて、千載一遇の好機ではないか、これを逃しては又候、猥雑な街並みが繁殖するばかりだ、と尻を叩いたのは震災後三日目です。》ということがこの現実の背景にはある。現場におり、現状をよく認知しているが故に、《法律で定められた二週間が期間の縦覧場所は何れの地区からも遠い三宮であったことを知り、不信へと変わりました。》という認識に到達する。そこから田中康夫は、《民主主義とは、仮令、時間が掛かろうとも愚直に話し合いを重ねて、然る後に数の論理で決着を付ける制度です。》との命題を得るに至る。そして田中康夫は神戸市長に対して以下の言を呈せざるを得ないのである。

農耕民族の私達は、横丁或いは路地と称される一見、雑然且つ猥雑な、然れども何故か落ち着ける空間が生理的に必要なのだと思います。が、地震発生直後に運転手役を買って出た局長が語るところによれば貴兄は、「阪神電車の高架がおかしい」「あのビルが壊れとる」と観察なさっていたのだとか。路傍には少なからぬ数の市民が傷付いて寒さに震えながら坐り込んでいたであろうのに、です。／自身に一票を入れてくれた人間よりもゼネコンに作って貰った建造物に目が行ってしまう斯くなる忠誠心が有ればこそ、「株式会社神戸」の首長として今回の都市計画を強行し得るのだ。

筒井康隆ら作家の姿勢を問う　「四人への手紙」には、「言葉によってしか伝えられぬもの」という章が付加されている。この章で田中康夫は、明石海峡を隔てて淡路島の対岸に位置する神戸市垂水区居住の筒井康隆が「震源地に一番近かった作家・ＰＡＲＴ２」なる『新潮』九五年五月号に於けるインタビューで語った内容を残念に思う、と記している。

震災を機に「断筆」を考え直して下さるのでは、との編集者の期待に対して、筒井康隆が、〈逆です逆です。五千五百人近くの人が死んで、自分がその中のひとりでなかったことが不思議に思えるような経験をして、もう小説なんてどうでもよくなった。〉〈小説を書くということ自体、もう馬鹿ばかしくてね。〉〈もう、どーでもいい。まーったく、どーでもいい（笑）〉と一気に捲し立てたのに対して、文芸評論家・松原新一が〈筒井氏にとって小説を書くということは、それまでその程度のことでしかなかったのかと問い返したくなるようなうろたえぶりでもある。表現行為の根拠を自己の内側にもつ人の発言とは思えぬほどの脆さではないか〉と『読売新聞』（大阪本社版・九五年四月二十四日付）で「呆れていた気持」（田中康夫）を表わしたのに対し「僕も一緒です」と同意して

いる。例の「無人警察」事件に関して作者・筒井康隆がそれをてんかん協会の人びとによる自らの自由な表現行為に対する圧殺と把え、断筆宣言をしたことは周知の通りであるが、わたしはてんかん協会の思想を是とし、作家たるべき筒井康隆は新たな作品を以て批判に向き合うのが至当で、断筆などすべきでない旨機会あるごとに訴えたが、阪神大震災に際しても同様の念を持つ。無念としか言い様がない。田中康夫は、《思えば、プロの「文学者」と看做(みな)されている人達の〝底の浅さ〟が目立ちます。驚いたことには〈世界を旅する作家〉なる惹句(じゃっく)を冠した上で一月二十九日付『毎日新聞』では立松和平氏が、森繁久彌氏の随筆かと見紛(みまこ)う「せめて身を慎んで生きていこう」というタイトルの〝修身〟講話を行なっています。〈世界を旅〉してきたにも拘らず、氏は〝日本的自粛〟を語るのみなのです。》と述べ、これら作家について《何と薄っぺらく感じる言葉の紡(つむ)ぎ手でありましょう。》と嘆いているのである。

（なお、本論攷は、平成14年度学部共同研究「日本文学・日本語の変遷と享受の研究」によるものである。）

〔注〕

（1）陳舜臣『神戸　わがふるさと』（二〇〇三年一月・講談社刊）序「慟哭の世紀」・第一部　エッセイ〈Ⅰ〉・第二部　ノベルズ・第三部　エッセイ〈Ⅱ〉・あとがき　によって構成。「慟哭の世紀」と題された序の冒頭に〈私の父は一八九六（明治二十九）年生まれで、故郷の台湾が日本に領有された翌年にあたる。この混乱期を古老は、「番仔反(ファナファン)」（番人の反乱）という。番人とは日本人のことである。〉と記されている。三歳上の兄は台湾生まれで、著者自身は神戸生まれである。

（2）陳舜臣「神戸よ、全世界に発光するのだ」（『神戸　わがふるさと』所収）

（3）陳舜臣「神戸よ」（『神戸　わがふるさと』所収）

（4）2に同じ

(5) 陳舜臣「生きる喜びと温かい友情」(『神戸　わがふるさと』所収)
(6) 陳舜臣「震災一周年にあたって」(『神戸　わがふるさと』所収)
(7) 6に同じ
(8) 6に同じ
(9) 陳舜臣「私たちは語部になろう」(『神戸　わがふるさと』所収)
(10) 陳舜臣「まだ見えぬ『美わしの神戸』」(『神戸　わがふるさと』所収)
(11) 田中康夫『神戸震災日記』(平成八年一月・新潮社刊、のち平成九年一月・新潮文庫版刊、二〇〇三年四月・Shincho On Demand Books として刊行)。「プロローグ　ボランティアへ」「ボランティア日誌(1月20日〜26日)」「女性記者のボランティア同行日記(1月27日〜29日)」「四人への手紙」「ゲンチャリにまたがって」「エピローグ　そして、KOBE」「単行本あとがき」「スティル『神戸』」「オン・ボランティア」より成る。
(12) 田中康夫「ボランティアへ」(『週刊SPA!』95年2月15号・『神戸震災日記』所収)
(13) 田中康夫「ボランティア日誌」(書き下ろし、『神戸震災日記』所収)一月二十一日(土)の章
(14)「ボランティア日誌」一月二十一日(土)の章
(15)「ボランティア日誌」一月二十二日(日)の章
(16)「ボランティア日誌」一月二十三日(月)の章
(17) 田中陽子記者(『週刊SPA!』編集部)+田中康夫「女性記者のボランティア同行日記(1月27日〜29日)」(『週刊SPA!』95年2月・15号)
(18) 同右
(19) 同右
(20) 同右
(21) 田中康夫「四人への手紙」(『週刊SPA!』連載「神なき国のガリバー」より(95年2月8日・2月22日・3月1日・3月8日・3月22日・3月29日・4月5日・5月27日各号)
(22) 同右